第一章　京都幼稚園の開園と「心の学園」

大正六（一九一七）～昭和二〇（一九四五）年

保護者たちの信頼と期待に応えて

京都幼稚園は、本願寺の大谷光瑞門主が設置者となり、岩井栄之助が園長、妻ツタが主任保母として、大正六（一九一七）年五月、新入園児八七名を迎えて開園した。もっとも現在の京都女子高等学校北門付近に建築された木造平屋建の園舎はまだ工事中で、正式な開園式は、竣工後の同年五月一七日に挙行された。

第1回の卒園記念写真（大正8年度）

当初の「私立京都幼稚園規則」によれば、入園資格は「満三年以上学齢迄」で、定員は「百名」。保育時間は「毎日四時間（土曜日は二時間半）で、始業時間は五月一日から九月末までが午前八時三〇分、一〇月一日から翌年四月末までが午前九時三〇分。保育料は「一人一ヶ月一円二十銭」であった。

朝倉暁瑞校長が本願寺に「幼稚園附設ノ義認可申請」を提出してわずか三ヶ月あまりで開園にこぎつけたにもかかわらず、初年度の新入園児が九〇名近くも集まったのは、小学校教育に半生をささげた岩井園長の人望や、東山で新たな歴史を刻み始めた学園への期待、永らく人々の心の拠り所として暮らしを支えてきた本願寺への信頼

『京都女子学園百年史　心の学園111年のあゆみ』（学校法人京都女子学園、2010年）

などが相まってのことだったに違いない。なお園児は、北は丸太町、東は吉田山、西は大宮通、南は伏見稲荷に至るまで、日本初の市街電車が走り、明治末以降、主要市域に路線が延伸されるなど、市電が重要な交通機関として発展した京都らしく、かなり広範囲の地域から通園してきていた。

幼児保育の種類は、前記「規則」によれば、「観察的ノ遊戯」「体育的ノ遊戯」「音楽的ノ遊戯」「模作的ノ遊戯」「考按的ノ遊戯」の五種だった。とりわけ初期の頃は、近代幼児教育の祖であり、世界初の「幼稚園」を創設したF・W・A・フレーベルが開発した「フレーベルの恩物（おんぶつ）」といわれる「六球」「三体」「立方体の積み木」などの遊具を使ったものが園児たちの遊びの中心で、長い間それら「フレーベルの恩物」が遊び道具として京都幼稚園に残っていた。

開園当初の模様について、当時の女性雑誌『婦人』に取材記事が掲載され、その概要が『京都幼稚園若草会報』に転載されている。

> 桜ノ組、紅葉ノ組、藤ノ組の三組にわかれ、保姆の踏みならすオルガンに足なみ合わせて開発室に導かれ、園歌を歌い、鳩ポッポの遊戯をし、お角力をとり、奇抜な玩具を弄び、保姆の指導に従って、茲ぞ楽園なりと云ったような顔をして遊んで居る。
>
> （『京都幼稚園若草会報』第一号・昭和四八年七月三一日付）

なお、大正から昭和初期にかけての関係者の話によれば、京都幼稚園の教諭たちは着物にたすき掛けの袴姿で、足元は美しい鼻緒の草履をはき、手技や遊戯、唱歌、談話、観察などの指導に日々熱心に取り組んでいたという。

行啓記念日の式典で披露した「月が出た」の遊戯

シャム王国のダンニ親王が来園（昭和2年11月10日）

ご台覧・讃仏歌遊戯「月が出た」と「青い目の人形」

順調に歩み始めた京都幼稚園におけるきわめて大切な出来事が、大正一三年一二月五日に実現した。貞明皇后の学園への行啓である。この時、貞明皇后より「香りゆかしき心の学校」とのお言葉をいただき、以後、学園は「心の学園」と呼ばれるようになったが、当日、校内でご台覧された催しの一つに、園児たちが懸命に演じた讃仏歌に遊戯を振り付けて踊る「月が出た」という台覧遊戯があった。

さまざまな色、柄、あでやかな、模様の振袖に白足袋姿の園児たちが「月が出た　月が出た／てまりのようにまんまるい／みほとけさまの　おこころは／月のようにまんまるい」と歌いながら、優雅に舞い踊るこの遊戯は、「埃をたてない静かな踊りであること」「後を見せないように振りつけること」など細やかな配慮による、当時「京舞」で知られる井上流名取風間みつ女史の創作であったと伝えられている。なお、「月が出た」の遊戯は、その後、学園が毎年行うようになった「行啓記念日」（のち「心の学園記念日」と改称）の式典のたびに「台覧遊戯」として園児たちが昭和四〇（一九六五）年ごろまで再現、披露してきた。

また、国際親善活動の一つとして、貞明皇后行啓三年後の昭和二年には、シャム王国（現在のタイ王国）の皇族の一人、ダンニ親王が来園されたこともあった。さらに昭和三年には、京都女子高等専門学校講堂で開催された、日米親善のためにアメリカから贈られた人形の歓迎会で、園児たちの遊戯「青い目の人形」「黒い目の人形」が披露された。

「栄養弁当すきやき会」の様子（昭和11年）

昭和10年に運用を開始したドイツ製通園バス「ダッチ号」

アメリカから日本への人形の寄贈のきっかけは、大正一三（一九二四）年、日米関係の悪化に伴い、排日感情の高まったアメリカで日本からの移民を実質的に禁止する「移民法の一部改正法」が成立したことだった。このことに胸を痛めた、二〇年以上滞日経験のある宣教師シドニー・ギューリックが「両国の子どもたちが文化交流して両国の友好を深める一助に」と、ひな祭りに合わせて、アメリカから日本の子どもたちに人形をプレゼントしようと呼びかけた。それに応えて、アメリカの四八州・約二六〇万人の人々が力を合わせて一二万体以上の人形を買い集め、昭和二（一九二七）年三月のひな祭りに向けて日本に発送した。横浜港や神戸港から陸揚げされた人形は、日本各地の小学校や幼稚園に寄贈された。なお、その折、各地の学校や幼稚園で歓迎会が行われ、後日、日本から返礼人形がアメリカへ贈られた。

これは、深刻な不況、恐慌から戦争への道をたどっていった昭和初期に花開いた貴重な国際親善のドラマである。

このほか、外国といくらかかかわりのあるエピソードをもう一つあげると、昭和一〇年に運行を開始した濃いレンガ色の通園バス「ダッチ号」は、一一人乗りのドイツ製自動車（ベンツ）であった。当時としてはかなりめずらしく、園児にも保護者にも好評だったが、戦時態勢が強まり、燃料のガソリン不足が深刻になるなかで、やがて木炭車に改造された。もっとも、この木炭車は馬力が弱いだけでなく、故障も多く、運休せざるを得ないこともしばしばで、その時は教職員が遠

くまで徒歩で迎えにいった。「ダッチ号」はその後、国家に徴用され、舞鶴方面へ供出されたという。

それはともかく、戦前、京都幼稚園ではドイツ製の通園バスを運行するなど、当時の生活文化の最先端を行く取り組みが目立ち、栄養補給のための給食も保護者の同意を得て早くから実践していた。祇園の老舗料亭「鳥居本」店主の協力によって斬新な献立がつくられ、当時では贅沢な「すきやき」を使った「栄養弁当すきやき会」も開かれた。

過酷な戦中、終戦前後と京都幼稚園

この間、幼稚園は「保育実習の場」という重要な役割を担って、新たな展開を見せていた。

その端緒となったのは、昭和五年四月。本願寺が、当時の山崎精華社会部長の創意に基づいて、京都女子高等専門学校内に仏教主義による本派本願寺保姆養成所を創設したことによる。以後、幼稚園は保姆養成所に全面的に協力して実習生たちを受け入れていった。

さらに昭和一四年一〇月、大谷光照前門主のご結婚記念として、京都保育研究所が本派本願寺保姆養成所内に設立された。その折、岩井園長は、京都幼稚園が保姆養成所に隣接することの必要性を訴え、関係者の協力を得て、その西隣（現在の東山寮）に木造瓦葺二階建、建坪一二三坪の新園舎を建築することになった。工事は順調に進み、新園舎は翌年（昭和一五年）春に完成して、盛大な竣工式が同年五月一五日に挙行され、記念に本願寺よりご本尊が下付された。このご本尊は現在、園舎二階のつどいの間に安置され、いまも園児たちが礼拝している。

明くる昭和一六年一月、岩井栄之助園長に代わって、岩井龍二が二代目園長に就任した。当時、日本は世界から孤立を深め、アメリカとの関係も破局の際に瀕し、同年一二月には日本軍がハワイの真珠湾を奇襲して太平洋戦争が勃発する。戦火は中国大陸から東南アジア、太平洋へと広がった。以後、軍需最優先で日ごとに生活物資の欠乏も深まり、幼稚園では紙やクレヨンなどの不可欠な教材も入手困難になっていった。教職員たちは自宅から紙を持参したり、端切れや新

『京都女子学園百年史　心の学園111年のあゆみ』（学校法人京都女子学園、2010年）

爆風で壊れた幼稚園舎（昭和20年）

聞雑誌で教材を手作りしたりした。また、下駄や草履をはいて通園する園児たちの送迎には必ずぼろ布を携帯し、馬町から東山七条の市電に乗るまでの間、園児の下駄や草履の鼻緒が切れるたびに、道端にしゃがみ込んでは鼻緒のすげ替えをしていたという。

戦時下、京都幼稚園は、「戦時保育所」という名で、午後四時まで保育した。毎朝、岩井園長が中央市場まで給食用食材を取りに行き、調理は、祇園の「鳥居本」の板前が腕をふるった。もっとも、戦況は悪化する一方で、昭和一九年末からはアメリカ軍による本土空襲は激しさを増した。

そして戦争末期の昭和二〇年一月一六日夜半、一機のB29が東山区上空を飛び、渋谷通り南側に沿って数発の爆弾を投下した。それによって渋谷一帯は戦災を受け、京都幼稚園とともに京都保母養成所（「本派本願寺保姆養成所」から改称）は被弾し、別棟にあった職員室と用務員室が倒壊した。老用務員とその娘の二名が生き埋め状態となったが、無事救出された（『東山タイムス』昭和三六年四月二〇日付）。

戦前から幼稚園の保育に力を尽くした一花一枝教諭が、爆撃直後、幼稚園に駆けつけた。その時の思い出をこう記している。

まっ暗な中を、足さぐりで幼稚園まで行きました。家は倒れたり吹き飛んだり、交番の所など足の踏み場もないほどでした。警報が鳴らないうちに爆弾がおとされたのですが、幼稚園にたどりつく頃警報は鳴りつづけるし、凄いことでした。職員室と用務員室はペシャンコです。用務員さんが子供連れで埋まってしまって、何とか助け出そう

『京都女子学園百年史　心の学園111年のあゆみ』（学校法人京都女子学園、2010年）

昭和15年に完成した第三小松寮

錦華寮での寮生活の様子（昭和7年）

れ、不断の宗教的雰囲気を感じ取られると、信心のある寄宿舎は「心の家」であり、仏教的情操教育を授ける学園は「心の学校」であるとの言葉を遺されたのであった。

昭和初期の学寮生活

貞明皇后の行啓を受けた効果もあって、昭和初期には女専をはじめ東山三校の学生は増加し、地方からの進学者もさらに多くなった。このため、錦華寮など四つの寮だけでは学生を収容しきれなくなり、昭和三（一九二八）年には、新たに第一小松寮（一三九名収容）が建設された。これにより、近隣の民家や神社境内の家屋に借用していた寮は廃寮となり、自修寮は昭和六年に、自治寮は昭和八年に、旧日吉寮は昭和九年に、それぞれ廃寮となった。

また、増え続ける学生に対応するため、昭和一三年には第二小松寮（一〇四名収容）が、昭和一五年には第三小松寮（八二名収容）がそれぞれ新築された。この頃には、寮生数は約六〇〇名にのぼり、食堂も錦華寮と第一小松寮の二ヶ所に設置されるほどの活気であった。

昭和七年に女専を卒業した河合シナは、当時の錦華寮の生活について「生涯の中で、大きな蘭の花のように美しく、かぐわしい時代だった」として、次のように振り返っている。

と思ってもどうにもならない。その中火事です。今の音楽教室の辺りがつぶれて火の手が上ったのです。消防の隊長らしい人を見つけて、用務員さんを助け出して下さいと頼んでも、火を消す方が手一杯でどうにもならない。あの辺一帯が焼けて了ったのです。

（『京都幼稚園若草会報』第三号・昭和四九年三月一九日付）

一花教諭はあの夜、まず真裏に爆弾が落ち倒壊した第三小松寮へ行き、負傷した寮生を毛布に包んで自宅へ運んだあと、園舎へ向かった。しかし女手一つ、がれきに埋まる用務員さん家族を救おうにもかなわず、翌朝あらためて現場に戻って捜索し、無事救出できた。

倒壊を免れた幼稚園は、京都女子高等専門学校（以下、女専）の校舎の一部を借りて保育を継続することにした。もっとも、女専の教室も爆風で窓ガラスはすべて吹き飛び、寒風がふきすさぶ、過酷な状況だった。幼稚園はすぐに再開されたものの、戦況は悪化する一方で、一時は閉鎖すべきかどうかで議論になったが、継続を決断。その背景には、保護者たちからのこんな言葉があった。

どうせ死ぬなら、どこに居っても死ぬのです。家に居ても、一緒に死ねるとは限りません。一時間でも、安全な所で、子供を育てて呉れ。

こうして終戦直後の混乱期も、教職員、園児、保護者みんなが力を合わせて乗り越え、昭和二一年三月の卒園式まで休園することはなかった。

室には二、三人各科まじって机を並べていた。先輩の室長さんが優しく指導して下さった。（中略）
朝食前にお室、廊下便所等の掃除をして朝食、登校、勉強と続いた。夕食後は裏門から袴をつけないで、連れだって散歩に出かけた。（中略）夜は勉強時間が終わってから、佛間に集り、お念佛して合掌した。
日曜日は外出が許され定刻までに帰った。外出の届けをするとお弁当を作って下さった。少しおくれても食事は残して置いて下さった。（中略）
寮では秋になると、観月会を計画して下さって広沢の池等へ連れて行っていただいた。（中略）三月には、お世話になったお姉様の送別会を催し、劇などをして別れを惜しんで名残りはつきなかった。
寮では余暇に絵画、茶、華、謡の先生を呼んで下さって手ほどきをしていただいた。

（『藤陵会だより』第三一号・平成七年二月二八日付）

当時の女専は、全国の女学生があこがれる学校であり、北は北海道から南は九州まで、多くの学生たちが親元を離れて入学し、寮生活を満喫したのである。

B29の空襲を受けた第三小松寮

太平洋戦争末期には、当時最も新しい寮であった第三小松寮が空襲の被害に遭うという惨事もあった。昭和二〇年一月一六日深夜、京都市内の高度六〇〇〇メートルの上空に侵入したB29一機は、当時〝モロトフのパン籠〟と言われた小型の爆弾二五〇個以上を渋谷街道沿いの馬町周辺に落とし、その一弾が第三小松寮の南寮を直撃した。第三小松寮では、寮生五名が倒壊した建物の下敷きになったが、夜明け頃には五名全員が無事救出され、寮生一名が頭部に負傷したほかはいずれも軽傷であった。

『京都女子学園百年史　心の学園111年のあゆみ』（学校法人京都女子学園、2010年）

爆撃で吹き飛ばされた第三小松寮
（昭和20年1月）

小松寮が空襲に遭ったこの時、錦華寮の寮長を務めていた半田タキヱは、当時の寮の様子を、次のように語っている。

突然「ドーン」という大きな地響きがあり、その途端、私の体がずしっと押さえつけられました。瞬間「埋もれた」と思いましたが、それは重い押し入れの戸であり、それが爆風で倒れてきたのでした。（中略）真っ暗な中を手探りで、残ったり怪我をした寮生は居ないかと探しながら、防空壕に避難しました。その頃になってやっと空襲警報のサイレンが鳴ったのです。この頃はまだ、京都が空襲されるとは思ってもいませんでした。

夜が明けて寮に戻ると、割れた窓ガラスの破片が壁や天井に突き刺さり、廊下を歩くのも危ないほどでした。（中略）私がおりました錦華寮の被害は、馬町と背中合わせの第一錦華寮だけだったと思います。この空襲を期に、京都近県にも敵機が飛来するようになりました。

空襲はほとんどが夜でした。ラジオは事務室に一台あるだけなので、警報が出る度にメガホンで「ただ今潮岬南方よりB29〇〇機北進中」と大声で寮全体に叫んで回り、夜もオチオチ眠れませんでした。

（『藤陵会だより』第三一号・平成七年二月二八日付）